

YAMAGA

近代の山鹿の
偉人たち
シリーズ

015

産婆の父、天然痘種痘予防の普及者（一八二八～一八九九）

福田信卿

ふく

だ

しん

けい（のぶきみ）

安政年間、肥後藩校再春館で内科を修業した。

その後、特に産科医師として自宅で産婆の育成を始める。

また各地で産婆養成のため出張講習し、四百六十人余を世に送り出した。そのかわら、明治の初めに流行した天然痘の予防を図るため、種痘の普及に努めるなど医学振興に寄与した。

信卿はまた教育にきわめて熱心で、産婆指導・種痘普及の繁忙の中にあっても、学校の委員として尽力した。

そして、地元の郷原岩原分校を日新学校として名称も変え本校として独立させた。

生い立ちと医学人としての決意

福田信卿は文政十一年（一八一八）五月十五日、玉名郡中富手永郷原村（現鹿央町郷原）に大久保善兵衛の三男として生まれま

た。

幼少のころ、その聡明さを見込まれて同村の医家である福田春澤から願われ、彼の養子となりました。

その後春澤には長女カオルが産まれ、そのカオルが成長すると彼女と結婚しています。カオルは天保九年（一八三八）十月三日生まれで信卿と十歳違いでありました。彼女は四男二女を育てながら、医業に打ち込んで家庭を顧みない夫を助けて内助の功に励みました。

養父の春澤は当時、産科の名医として有名でした。

信卿は養父の熱心な教育を受けて早くから産科を学び、肥後藩校の再春館に入学して本道（内科）を勉強するとともに産科の研修にも励みました。

すでに家で養父の指導を受けていた上に、本人の並々なりぬ努力の結果、産科の治療は同じクラスですば抜けて優秀な成績だったといわれます。

再春館を卒業して村に帰った信卿は、養父の産科治療を手伝いながらお産の苦しみに悩む妊婦を何人も見ました。その当時お産で命を落とす母親も少なくありませんでした。そして、妊婦に接するたびに、産婆の仕事の重要さを痛感していきました。

その頃の産婆は「取り上げ婆」といわれ、村の老婆の機転が

利いた人が自分の分娩の体験をもとに、見よう見まねでやるだけでした。もちろん産婆学の講義など受けた者はいませんでしたし、受けようにもその方法がありませんでした。

この実情を見て信卿は、生涯を産婆の育成指導にささげようと決意したのです。

※1 玉名郡：江戸時代、中富手永（次の説明を参考）は山鹿郡ではなく玉名郡であった。

※2 中富手永：現在の山鹿市藤井、鹿本町中富校区、鹿央町千田校区及び米野岳校区の範囲。手永とは細川藩が決めた行政（地域）単位。村と郡の中間の規模であった。ちなみに山鹿郡には山鹿手永と中村手永があった。

※3 再春館：宝暦六年（一七五二）、八代藩主細川重賢が飽田郡横手手永古町村新町（現在の熊本市二本木）に開校した医学校。その後校舎の移転があったが明治三年（一八七〇）まで続き、熊本医学校（のちの熊本大学医学部）につながった。

信卿産婆の育成へ立ち上げる

安政四年（一八五七）、数え年三十歳の若さで信卿は意を強く持つて産婆育成指導の仕事に取り掛かりました。

養父や妻の温かい理解があり、まず医院の一部を改造して教室を造り、標本の図やテキストを用意しました。

テキストには賀川子玄の「産論」上下二巻を使い、それに自分の見解を加えて使用したといわれています。

さらに明治四年（一八七二）からは水原博斉（三折）の『産育全書』、片倉元周（鶴陵）の『産科発蒙』などもテキストに加えました。



福田医院 手前の道路は豊前街道

彼の熱意と懇切丁寧な教え方は非常に評判となり、着々と成果をあげました。

その実績に対して、県から次のような知らせがありました。

中富郷 福田信卿

右者諸郷産婆共へ産科指南中毎歳米拾俵宛差遣候此段可達也
辛未 十一月十五日 熊本県 菊池出張所
(あなたはいろいろなところで助産師に指導育成をしています。そのことに対して毎年お米を十俵差し上げます。以上お知らせします。)

辛未とは明治四年（一八七二）のことです。これは三年間続けられましたが、県庁の改革、庁舎の解体に伴い廃止されました。

この温かい対応に感激した彼は翌年（明治五年）の春、出張講習を計画しました。県の許可を受けて、郡内はもとより阿蘇内牧、小国、波野まで出向き、最初の出張講習が終わると、再度、阿蘇郡西原村、高森、野尻、蘇陽町菅尾などを指導して回りました。

電車も自動車もなく、道路もでこぼこであつたと思われる明治初期のことです。ただ行くだけでも大変であつたろうに、その上田舎に泊まりこんでの講習は、さぞかし困難なことであつたろうと想像されます。

日付はありませんが、阿蘇・小国・波野方面の受講者名簿と思われる「阿蘇南郷産婆控」が残っています。それには次のように、場所と参加した産婆の人数が記されています。

「内牧村が三人、その他二名が狩尾村、波野郷中江村、小国北里組、宮乃原組、中原組、そして一名がそれぞれ内牧湯乃浦、小野田新村、



産湯の水として使われた井戸

宮路懸竹乃内、役大原、植木乃原村、坂梨、満願寺組、西里組、黒淵組、馬場組」

このほかに男子名で七名の記述がありますが、いずれも名前からして医者であろうと思われます。

こうして過酷な出張講習を実施したものの、対象地が遠く、自分の病院を休んで行つたため限界を感じ、自らの医院にいつも開いている産婆講習場を開設しようと考えました。

※4 賀川子玄（玄悦）〔元禄一三年～安永六年一七〇〇～一七七七〕…近江国（現在の滋賀県）出身の産科の医者。京都で活躍し後に徳島藩医となる。回生法という日本最初の産科手術を行い、数多くの産婦の生命を救った。

※5 水原博斉（三折）〔天明二年～元治元年 一七八二～一八六四〕…近江国（現在の滋賀県）出身の産科の医学者。難産でも母子を救う医療器具である「探頷器」を考案した。

※6 片倉元周（鶴陵）〔宝暦元年～文政五年 一七五一～一八二二〕…相模国（現在の神奈川県）出身の医学者。京都で賀川流産科を学び、その後江戸城で大奥の難産と呼ばれ治療した。

信卿自分の病院に産婆講習場を開く

信卿は産婆講習場を開くにあたって、受講した生徒は産婆の資格が取れるようにと、明治十二年十二月十五日、熊本県令に願書を提出しています。これに対し、四日後の十二月十九日付で「書面ノ趣聞置候事（書類の件は分かりました）」と許可が出て

います。これは異例の早さで、信卿の実績に対する熊本県の評価と受け止められます。

県の許可を得た彼はさっそく受講者を募りました。受講資格は「十六歳以上、カタカナの読める者」というゆるやかなものでした。

毎月一日と十五日を定例日として授業をしましたが、生徒は日増しに増え、初心者はもちろん開業中の産婆まで集まってきました。

明治二十年（一八八七）三月には産婆講習会を作り、次第に産



信卿の時代を残す裏庭（梅の木、井戸、蔵は当時のもの）

婆学校のような形態を整えました。

さらに、春と秋には県の担当官も出席し、産科のトップクラスの専門家を講師として招いて、産婆学、生理学、解剖学などの講義を受けさせるまでに発展してきました。

産婆講習会の卒業までの期間は、寄宿舎生は十カ月、通学生は二十五カ月で学費は自己負担でしたが、授業料は集めませんでした。

信卿が亡くなってその子典國の代になって、明治三十五年から三十七年まで続き、三十九年からは山鹿郡役所から年四円の補助をもらえるようになりました。

この頃の授業科目は、解剖学の概要、婦人生殖器およびこれに關係する諸臓器の概要のほか、榊順次郎や浜田玄達の産婆学を使って実地研修を行ったといえます。

当時、内務省技師中原東一郎は落合内務と県の中江係官を連れて産婆講習会を視察し、その内容のすばらしさに驚き感心し、ほめたたえたそうです。

こうしてたくさんお産婆を養成しましたが、その人数は四六四人に上り、当時県下の約半数にあたる数だったといわれます。そして産婆一人当たりの取り上げ数は、戦前で平均五〇〇人前後といわれますから、彼が育てた産婆の取り上げた赤ん坊の数は、いかに多かったのでしょうか。

※7 榊順次郎（昭和十四年（一九三九）没）静岡県沼津出身の産科医学者。ドイツ留学後、産婦人科病院を設立した。日本産婆看護婦学校を開設し校長を務めた。

※8 浜田玄達（安政元年〜大正四年 一八五五〜一九一五）肥後国大岳村（現在の宇城市三角町）出身の医学者。帝国医科大学（現在の東京大学医学部）の教授となり、産科学教室産婆育成所を開設した。また、日本婦人科学会を創立し会長を務めた。

熊本に天然痘の種痘を普及させる

今では天然痘の流行は昔話になりましたが、江戸時代には猛威をふるい、明治になっても時々流行をきたしました。ジェンナーによって発明された種痘の方法は、藩医の高橋春圃が寺倉秋堤とともに長崎から肥後に伝えました。しかし、その種痘は県内各地にまであまり広まっていなかったため、信卿は熊本に在る寺倉秋堤に弟子入りし、種痘の知識を得るとすぐに痘苗の自家生産を試みました。

健康な牛を数頭買い入れて、一番目の牛に天然痘を植えつけ、その痘を二番目の牛に、それからまた次の牛へと移し植えて、六頭目になったとき初めて人体に使うことのできる痘苗を得ることができました。

喜びあふれた彼はさっそく実行に移そうとしましたが、住民からは「種痘をすると角が生える」と頑固に抵抗される始末でした。それでも正しい知識を伝えることを一生懸命行い、次第に受け入れられるようになっていきました。

明治六年（一八七三）三月、県に提出した種痘の願い書は、すぐさま認められ、県から免許状も発行されました。

それから彼の活動は本格的になり、県のリーダーとして認められるようになりました。明治九年（一八七六）には熊本医学学校種痘課から第六区内の種痘医観察の役も任されています。第六大区とはす

ちょっとコラム

●天然痘と種痘ワクチンを発見したジェンナー

天然痘は非常に感染力の強い天然痘ウィルスによる病気
で、発病すると死に至るとして古くから恐れられていまし
た。仮に助かっても身体中にできものの跡（痘跡〔とうせ
き〕、あばた）が一生残るので、江戸時代には「見目定め
の病」としてとても嫌がれた病気でした。

この恐ろしい病気の予防法を開発したのが、イギリスの
医学者のエドワード・ジェンナーでした。彼は、「牛痘
（牛の病気）にかかった人は天然痘にかからない」という
農民の言い伝えをヒントに研究を重ね、1789年に天然痘ワ
クチンを開発しました。

ワクチンとは病原体（病気のもと）を弱くしたものを注
射などで体に入れ、体の中に抗体（免疫）を作らせること
によって、それ以後その病気にかかりにくくするというも
のです。最近では新型インフルエンザの予防方法としてイ
ンフルエンザワクチンが使われています。

ジェンナーの天然痘ワクチン開発後、その方法は世界中
に広まり、たくさん人々の命を救うことになりました。日
本には文政六年（1823）、ドイツ人でオランダ商館医の
シーボルトが牛痘を持ってきて、初めて種痘を行いました。

（しかしこれは成功しませんでした）日本で初めて成功し
たのは、それから26年後の嘉永二年（1849）、佐賀藩医
の橋本宗建によるものでした。

それから全世界で種痘による天然痘予防や天然痘根絶計
画が進められ、天然痘は各地で発生しなくなっていきまし
た。そしてついに「全世界から天然痘は無くなった」とい
う天然痘根絶宣言が、1980年WHO（世界保健機関）から
発表されました。

なわち菊池郡、鹿本郡を指します。

のちに、「明治二十九年、三十年と全国的に天然痘が流行し、熊本
県でも流行してかなりの被災者が出たが、本郡（鹿本郡）は幸いに
その被災を免れた」という報告がなされていますが、これは信卿の
努力の結果でしょう。

※9 高橋春圃〔文化二年～慶応四年 一八〇五～一八六八〕肥後国

阿蘇郡宮山村（現在の阿蘇郡西原村）出身の医学者。漢方医学を
学んだ後、長崎で西洋医学を勉強する。オランダ人医師から種痘
法を学び、熊本に帰ってその普及に努めた。



福田信卿、カオル夫妻の墓



昭和61年 熊本県近代文化功労賞受賞記念写真(左から2番目が信卿のひ孫となる福田郁夫氏)

※10 寺倉秋堤(文化十一年～明治十七年
一八四四～一八八四) 肥後細川藩医。明治維新
後、熊本医学校(古城医学校)の設立に力を
尽くした。この医学校の一期生には北里柴三郎
(破傷風血清療法とペスト菌発見)がいた。

熱意ある村の教育指導

彼はまた村の教育にきわめて熱心でした。産婆
指導、種痘の普及等の超多忙な中にあつても、学
校教育にも委員として力を尽くしました。

もともと郷原村の学校は、隣の岩原村の分校の
学校でした。彼は村民と図り戸長と連名で熊本県
に校名改称願いを提出しました。それが受理され
て岩原日新学校として独立しました。明治十三年
(一八八〇)のことでした。その後も学校への教
材の整備にも協力をおしませんでした。

このほか、第六大区議員を務めたり
地租改正委員をしたり、よく体が続くものと思
われるほど各方面で活躍しています。

最後に

彼は事業家と言つていいほど働きましたが金銭
に対してこだわる人ではありませんでした。産婆
の講習に出かけても無報酬、産婆講習会の授業料
も取らず、いつも「払えるだけもらつ」といった

年表 History

文政十一年 (二八二八)	▼	玉名郡郷原村(現、山鹿市鹿央町岩原)に大久保善兵衛の三男として生まれる 幼少のころ、同村の医家福田春澤の養子となる
天保九年 (二八三八)	▼	福田春澤に長女カオル(のちの信卿の妻)誕生
安政四年 (二八五七)	▼	産婆育成指導にとりかかる
明治四年 (二八七二)	▼	産婆育成に対し熊本県より米十俵をもらう 明治六年までの三年間 県の許可を受けて出張講習を始める
明治六年 (二八七三)	▼	種痘の許可を申請し、県から免許状を受ける
明治九年 (二八七六)	▼	熊本医学校種痘課から第六大区の種痘医観察の役を委嘱される

明治十二年 (二八七九)	▼	自らの病院で常設の産婆講習を開始
明治十三年 (二八八〇)	▼	村民らとともに懇願し、郷原村の岩原分校を岩原日新学校に独立させる
明治二十年 (二八八七)	▼	産婆講習会を開設
明治二十九年 (二八九六)	▼	明治三十年にかけて全国的に天然痘が流行したが、鹿本郡では被災が免れた
明治三二年 (二八九九)	▼	三月三日没す 享年七十二歳
大正七年 (二九一八)	▼	熊本県医師会の功績賞受賞
昭和六一年 (二九八六)	▼	熊本県近代文化功労者顕彰受賞

ところでした。つまり「いじんじやう医は仁術なり」をじっせん実践した人でした。そのため、彼の生活はゆつぱく裕福どころか貧しく質素に近かったようです。

福田信卿は明治三十二年(一八九九)三月三日、郷原の自宅で亡くなりました。七十二歳でした。

墓は医師や産婆の弟子たちと子の福田典てんい園等によって、自宅近くに建てられました。彼の功績が墓のひめい碑銘にびつしりと刻み込まれています。

その後、福田信卿の数々の功績に対して、熊本県医師会いしかいは大正七年(一九一八)功績賞を贈り、熊本県は昭和六十一年(一九八六)に熊本県近代文化功労者こうろうしやけんしやう顕彰を贈って彼の功績を讃えています。

近代の山鹿の偉人たち 015

産婆の父～天然痘種痘予防の普及者～ 福田 信卿

平成 22 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課
〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田 2085(博物館内)
TEL 0968-43-1691

編集委員

多田隈亮典(山鹿市文化財保護委員)
山口健剛(山鹿市教育委員会文化課)

参考文献・ご協力頂いた方(敬称略)

福田郁夫(鹿央町郷原)

参考資料

福田家所蔵文書

『鹿本郡市医師会史』昭和 46 年

佐伯清太『先覚肥後の科学者』昭和 18 年

森川恒臣「助産婦の先達福田信卿」熊本日日新聞(昭和 43 年 5 月 26 日付)

原口長之「福田信卿先生」